

歴史散歩資料

# 「小金の歴史」

小金地区町会自治会連合会 会長 大塚 清一

## (1) 原始

自然豊かな縄文時代  
(縄文文化から弥生文化へ)

## (2) 古代

古墳文化と豪族の出現  
大和朝廷とのかかわり  
新たな展開～荘園の増加と武士の台頭

## (3) 中世

鎌倉・室町幕府とのかかわり  
武士や民衆の成長  
戦国時代～千葉氏・高城氏の盛衰  
豊臣秀吉の支配と小金町の変化

## (4) 近世(江戸時代)

徳川家康と本土寺・東漸寺  
徳川将軍とのかかわり  
本多忠勝との関係  
水戸家とのかかわり  
小金牧の管理

## (5) 小金宿の様子

幕末の小金宿

(1) 原始(40000 年前～700 年ころ)

西 暦	で き ご と	備 考
6000年前 縄文時代中期	縄文装飾を主体とした土器が使われる。 広場などをともなう定型化したムラが出現する。 (松戸市幸田貝塚等)。	奥東京湾の 形成
100年頃	下総地域では、大規模なムラも存在するが継続期間が短い小規模なムラが分立する傾向にある。 中期末葉にあらわれた土器棺墓では、異系統の土器の組み合わせも見られる(市川市国府台遺跡等)。	
550年頃	下総地域の古墳に、横穴式石室が導入される(市川市法皇塚古墳等)。	新しい支配者の登場

(2) 古代(645(大化元)年～1179(治承3年))

西 暦	で き ご と	備 考
645 (大化元)年	東国の国司が任命され、戸籍の作成と田地の調査などが命じられる。	中央による 支配(1)
721 (養老5)年	この年、下総国が葛飾郡大島郷(柴又)・倉麻郡意布郷・釵托郡山幡郷などの戸籍を太政官に提出する。	公地公民制 の一つの姿
8世紀前半 まで	現在の市川市国府台辺りに下総国府が設置される(市川市下総国府関連遺跡)。	中央による 支配(2)
771 (宝亀2)年	武蔵国の所属が東山道から東海道に変更され、道順は、相模－武蔵－下総とされる。	社会の環境 変化
1021 (治安元)年	<small>すがわらのたかすえ</small> 1- 菅原 孝標 が上総介の任期を終えて帰京する。のち、孝標の娘がこの時を回想して『更級日記』を著す。	国司派遣の 様子

(3) 続古代(645(大化元)年～1179(治承3年))

西 暦	で き ご と	備 考
1146 (久安2)年	4- 平(千葉)常胤 <sup>つねたね</sup> が、父 常重 <sup>つねしげ</sup> の未進分を下総国に納入し、相馬郡司となることを、下総国司から認められる。	千葉氏の支配力の増強

(4) 中世(1180(治承3)年～1589(天正17年))

西 暦	で き ご と	備 考
1180 (治承4)年	9-17 源頼朝 <sup>みなもとのよりとも</sup> が下総国府(市川市)で千葉常胤と対面する。	千葉氏が有力御家人へ
1428 (正長元)年	(前の)応永年間 平賀本土寺で『本土寺過去帳』の記載が始まる。	<4-27> 当時の人々の姿
1455 (康正元)年	8-15 以降 足利成氏 <sup>しげうじ</sup> 方の千葉(馬加)康胤 <sup>ま ぐわ り やすたね</sup> が千葉城に入る。上杉方は千葉胤賢 <sup>たねかた</sup> の子 実胤 <sup>さねたね</sup> ・自胤 <sup>よりたね</sup> 兄弟を取り立て、市川城に入れる。	<7-25> 足利方と上杉方の勢力争い?
1484 (文明16)年	8-15 以降 原胤房 <sup>たねふさ</sup> が小金城に入る。	太田道灌の活躍?
1521 (応永元)年	5-15 下総国馬橋城が太田道灌 <sup>どうかん</sup> により築かれる。  市川で小弓公方 <sup>おゆみ</sup> 方と千葉氏方が合戦する。	<8-23> 足利方と千葉氏の争い
1538 (天文7)年	10- 小弓公方足利義明 <sup>よしあき</sup> ・子 義淳 <sup>よしあつ</sup> ・弟 基頼 <sup>もとより</sup> らが松戸相模台の合戦で戦死する。(第1次国府台合戦)。同合戦に伴い、武田信隆 <sup>のぶたか</sup> は北条氏の支援のもとで復帰、原胤清 <sup>たねきよ</sup> は小弓城を回復する。	足利方の力は? 勢力関係の変化
1561 (永禄4)年	7- 足利義氏 <sup>よしうじ</sup> が関宿城から北条方の高城胤吉 <sup>たかぎ たねよし</sup> の本拠地小金城に入る。関宿城には梁田晴助 <sup>やなだ はるすけ</sup> が再び入る。	高城氏の存在は?

(5) 続中世(1180(治承 3)年～1589(天正 17 年))

西 暦	で き ご と	備 考
1564 (永禄7)年	1-7～8 北条・里見氏両軍が下総国国府台で合戦に及び、北条氏側が勝利する(第 2 次国府台合戦)。	高城氏との かかわり
1566 (永禄9)年	2- 上杉 <sup>てるとら</sup> 輝 <sup>けんしん</sup> 虎(謙信)が高城 <sup>たねとき</sup> 胤辰の本拠地小金城を攻撃する。	上杉氏の小金 への侵攻
1569 (永禄 12)年	2-28 里見勢が下総国市川・松戸に侵攻し、さらに原氏の臼井城を攻める。	里見氏の侵 攻
1582 (天正 10)年	12-16 高城胤辰が死去する。これに先立つ、14 日、高城竜千世 <sup>たねのり</sup> (胤則)が北条 <sup>うじなお</sup> 氏直より領国・家臣の継承を保証される。	北条氏とつ ながる高城 氏

(6) 近世(1590(天正 18)年～1867(慶応 3 年))

西 暦	で き ご と	備 考
1590 (天正 18)年	4-26 豊臣軍の浅野 <sup>ながよし</sup> 長吉(長政)・木村一が徳川家康の家臣本多 <sup>ただかつ</sup> 忠勝・鳥居 <sup>もとただ</sup> 元忠・平岩 <sup>ちかよし</sup> 親吉とともに小田原を出発し、各地の城の攻略にあたる。 5-5 小金城が浅野長吉に明け渡されたと伝えられる。 ※7- 北条 <sup>うじまさ</sup> 氏政・氏直父子が豊臣 <sup>ひでよし</sup> 秀吉に降伏する。徳川家康が関東に移封される。 7-5 北条氏の本拠小田原城が落城する。同城にいた千葉氏をはじめ、酒井氏・大須賀氏・万喜土岐氏・井田氏らの房総諸氏が滅亡する。 8-7 本多忠勝が上総国万喜城を与えられる。のちに上総国夷隅郡大多喜に 10 万石で入部する。	豊臣氏の全 国支配へ。
1600 (慶長5)年	9-15 関ヶ原の合戦が起こる。本多忠勝が東軍の軍監として、次男 <sup>ただとも</sup> 忠朝とともに大多喜の軍勢を引き連れて活躍する。	千葉氏の滅 亡。高城氏 は？  本多氏の存 在は？

(7)続近世(1590(天正 18)年～1867(慶応 3 年))

西 暦	で き ご と	備 考
1601 (慶長6)年	1-1 本多忠勝が伊勢国桑名に転封されるが、次男忠朝は 5 万石で大多喜城に残る。	徳川家康はいつ浄土宗に帰依したか？ <7-13>
1615 (元和元)年	5-7 (慶長 19)大多喜城主本多忠朝が大阪夏の陣で討死する。	
1616 (元和2)年	12-16 本多 <sup>まさしげ</sup> 正重が下総国相馬郡で加増を受け、以降幕末まで続く下総領の基礎ができる。	
1617 (元和3)年	9-18 本多 <sup>まさとも</sup> 政朝が播磨国竜野に 5 万石で移封され、本多氏3代の大多喜支配は終焉を迎える。	利根川の東遷との関係？
1622 (元和8)年	6-19 里見 <sup>ただよし</sup> 忠義が伯耆国倉吉で死去し、里見家は断絶する。	
1624 (寛永元)年	寛永年間 新たに江戸川が開削されると、権現堂川～庄内古川～江戸川が下総・武蔵両国の新しい国境となる(旧国境は古利根川～隅田川)	
1633 (寛永 10)年	この年 水戸家が下総国小金に鷹場を拝領し、小金町に御殿を置く。	小金の新たな役割
1642 (寛永 19)年	7-16 堀田 <sup>まさよし</sup> 正睦が江戸城防備の重要拠点である下総国佐倉に 11 万石で入部する。また、これに伴い佐倉牧を 7 牧に分け、柳沢・高野・内野の 3 牧を堀田氏預かりとし、残りの 4 牧(油田・矢作・取香・小間子)を幕府直轄として小金の綿貫氏に管理を委ねる。	牧の管理の進展
1657 (明暦3)年	このころ 小金牧に「小金御厨」という御馬宿が建てられ、馬預 <sup>すわべなりさだ</sup> 諏訪部成定の下役が月交代で在番勤務する。	小金牧の管理の充実

(8)続近世(1590(天正 18)年～1867(慶応 3 年))

西 暦	で き ご と	備 考
1661 (寛文元)年	寛文年間 上総・下総で、鷹場や交通などの請負負担に対応する「五郷組合」が成立する。 寛文・延宝年間 小金牧のうち庄内牧(野田市)で耕地開発が行われる。	<4-25> 町場や村への負担増大
1665 (寛文5)年	12- 日暮 玄蕃 <sup>げんぱ</sup> が日蓮宗本土寺から天台宗福満寺(柏市)へ檀家替えし、墓地も改葬する。	日暮氏の反抗?
1688 (元禄元)年	この年 江戸川で洪水がおこり、樋ノ口堤が決壊する。 このころ 綿貫氏が小金牧に書役として配属される。	<9-30> 松戸付近の様子と綿貫家
1717 (享保2)年	5-15 水戸藩が再び幕府から鷹場を拝領し、手賀沼や柏周辺の利根川辺などの村々が水戸藩の鷹場に編入され、鳥獵が禁止される。	生業の制約
1718 (享保3)年	8- 江戸川金町・松戸関所前の渡船が松戸町の運営となる。	松戸の発展・1763 に松戸宿となる
1722 (享保7)年	8-9 老中水野 忠之 <sup>ただゆき</sup> が代官小宮山 昌世 <sup>まさよ</sup> に小金・佐倉両牧の牧地と開発可能地の支配権を、野馬奉行綿貫氏に従来どおりの野馬や牧士の支配権を認める。	新たな牧の管理者
1723 (享保8)年	8- 小金 5 牧のうち、中野・下野の2牧が綿貫氏の支配を離れ、野馬・牧士ともに小宮山昌世の支配となる。 この年 幕府代官小宮山昌世が牧開発のため金ヶ作陣屋を設置する。	牧開発の展開

(9)続近世(1590(天正 18)年～1867(慶応 3 年))

西 暦	で き ご と	備 考
1725 (享保 10) 年	3-27 下総国小金中野牧(鎌ヶ谷市・柏市)で 8 代 將軍徳川 吉宗 <sup>よしむね</sup> により鹿狩が開催され、鹿狩御用 掛の代官小宮山昌世と関東郡代伊奈 忠達 <sup>ただみち</sup> が指 揮する。	武芸奨励の 一つ
1726 (享保 11) 年	3-27 小金牧で 2 回目の吉宗による鹿狩は、番方 の幕臣が総動員され(供を含む 8000 人～1 万 人)、村々から徴発された勢子人足も 1 万 7500 人 と大規模になる。鹿狩の経費は約 5000 両。代官 小宮山昌世と関東郡代伊奈忠達が指揮する。	連続しての 鹿狩の意味 は?
1772 (安永元) 年	安永年間 流山村の秋元家 4 代目秋元三左衛門 が酒造を開始すると伝えられる。	<11-16> 醸造業の発 展
1799 (寛政 11) 年	この年 小林 一茶 <sup>いっさ</sup> が松戸馬橋の大川 立砂 <sup>りゅうさ</sup> の臨 終をみとる。	俳句の下総 での発展
1810 (文化7) 年	6- 小林一茶が流山・小金原などを訪れ、16 日に 布川で「つく舞」を見物する。	
1835 (天保6) 年	4- 一月寺の末寺である望陀郡三黒村(袖ヶ浦 市)松見寺の看主 友鷲 <sup>ゆうが</sup> (神谷転 <sup>かみやうた</sup> )が江戸で捕縛さ れ、但馬国出石藩の仙石騒動が露見する。	世情不安と 虚無僧?
1863 (文久3) 年	8- 野田村(千葉市)で、水戸街道の小金宿への 加助郷拒否運動がおこる。	農民層の抵 抗?
1864 (元治元) 年	3- 水戸尊皇攘夷派の天狗党が筑波山で挙兵 し、利根川流域の豪商農から金品を差し出させ る。 11- 新たに 3 人の関東郡代が任命され、武蔵・相 模両国は松平政之、安房・上総両国は花房職補、 下総国は杉浦正尹と担当が決定する。	<2-20> 世情不安と 倒幕への動 き? 関東の治安 回復?

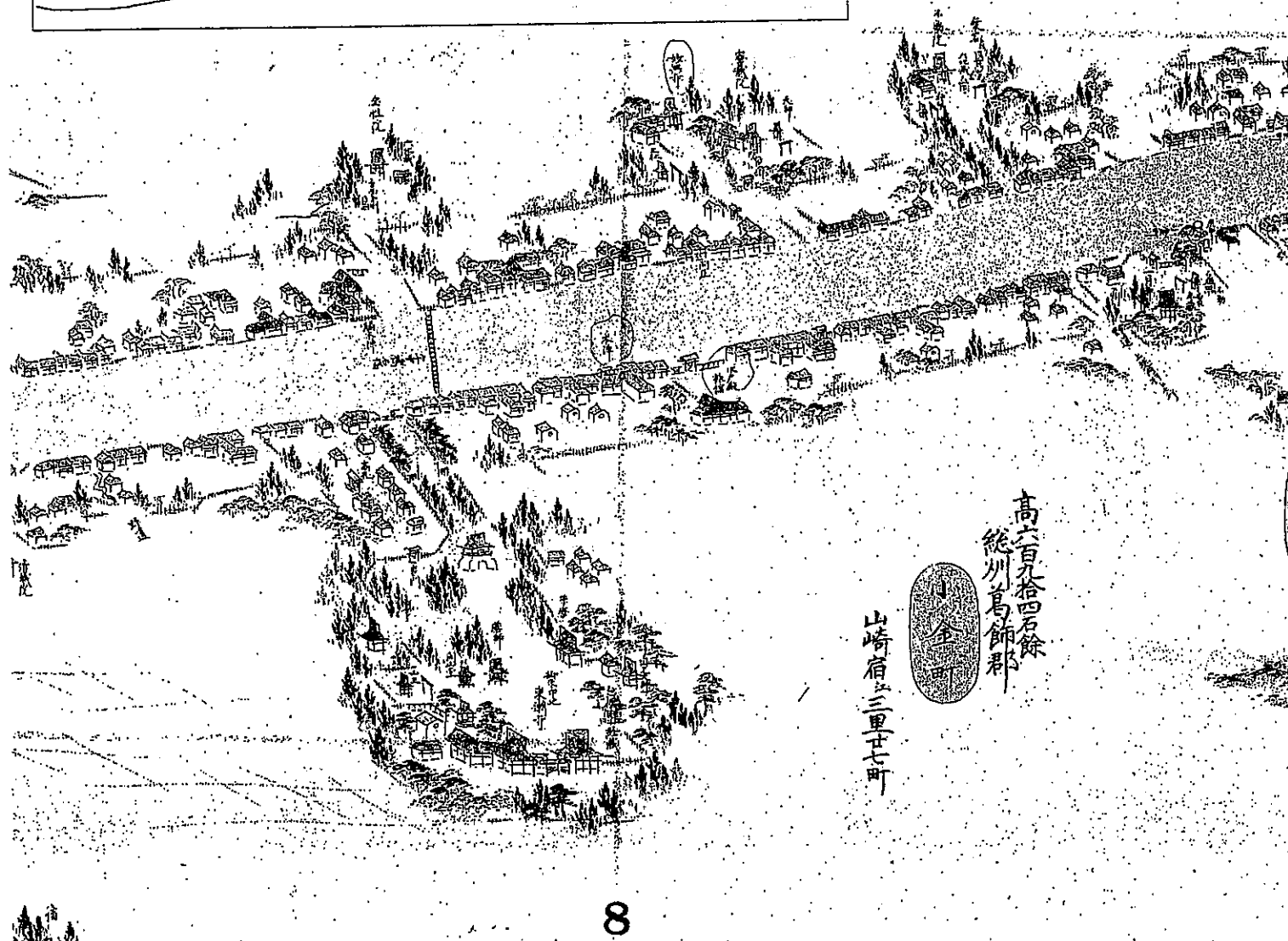
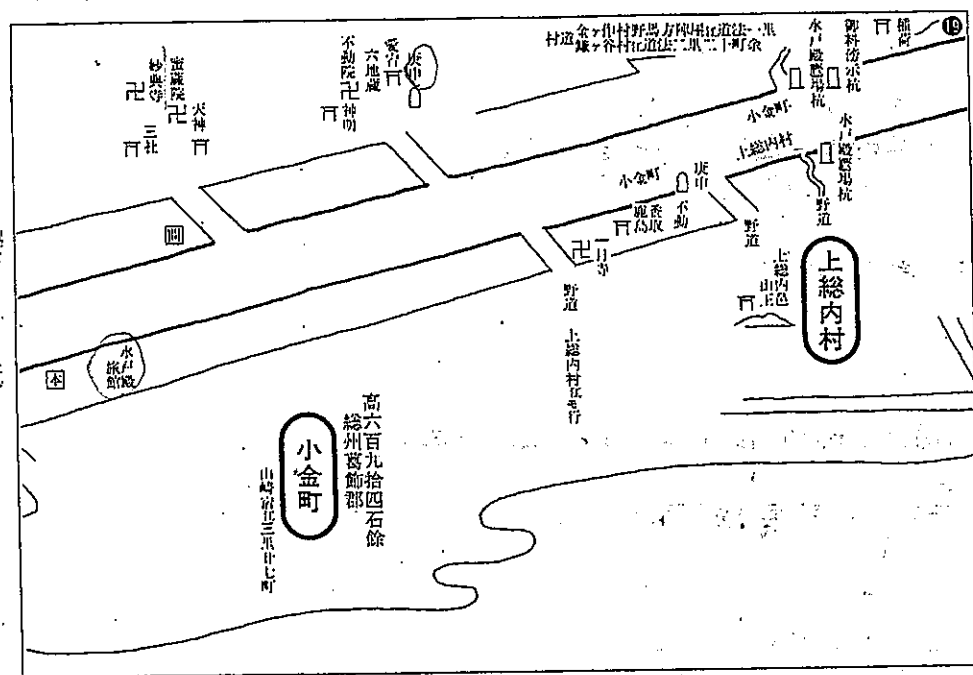
(10) 続近世(1590(天正 18)年～1867(慶応 3 年))

西 暦	で き ご と	備 考
1866 (慶応2)年	8- 関東郡代に任命された河津 祐邦 <sup>すけくに</sup> が 9 月に常陸・下総・上総・安房の支配を命じられる。	幕府による 支配関係の 変更
1867 (慶応3)年	この年 房総の牧場・野馬奉行綿貫氏・牧士が、すべて勘定奉行並在方掛の支配となる。 フランスから幕府へアラビア馬 26 頭が贈られ、野馬奉行綿貫夏右衛門および牧士にアラビア馬の横浜伝習御用が命じられる。	綿貫氏の役 割の再確認
1868 (慶応4)年	※2-12 徳川 慶喜 <sup>よしのぶ</sup> が上野寛永寺に退去 ※3-3 赤報隊の 相楽総三 <sup>さがらそうぞう</sup> (相馬郡出身)・渋谷 総司 <sup>そうじ</sup> (葛飾郡出身)が偽官軍として処刑される。 4-3 元新撰組局長近藤 勇 <sup>いさみ</sup> が流山で捕らえられる。 ※4-11 江戸開城。徳川慶喜が水戸へ退去。 ※7-17 鎮将府設置。江戸を東京と改称。 7- 旧旗本桑山圭介が下総・武蔵国の当分知県事となる。 8-3 熊本藩が下総・常陸の鎮定を命じられる。 8-8 熊本藩士佐々布貞之丞が下総知県事に任命される。 ※9-8 明治と改元。 ※10-13 明治天皇が東京に入り、江戸城を皇居とし、東京城と改称。 12-18 豊後佐伯藩士水筑竜が下総知県事に任命される。	幕末の混乱 と下総の状 況 小金宿の混 乱した状 況？ 王政復古の 大号令 当座の支配 者  明治新政府 の支配(中央 集権)

【千葉県の歴史 別編 年表より近世までを抜粋】



2 『関宿通多功道見取絵図 第一巻』より抜粋及び一部編集



## 小金宿

江戸時代の前期、御三家のひとつ水戸徳川家の本拠水戸と江戸の間（約 120km）を結ぶために整備されたのが、水戸道中（俗称・水戸街道）であり、小金宿は、千住・新宿・松戸の次、四番目の宿場に指定された。小金宿は次の我孫子宿と手前の松戸宿など、公用旅行者の求めに応じて人足と馬を出し、また本陣・脇本陣を設けて公用旅行者の休憩・宿泊の役目を負っていた。こうした負担の一方、周辺の農村には許されなかった特権が与えられた。一般の旅行者の宿泊（旅籠屋）や、公用のない時に人足・馬で旅行者・荷物を運び駄賃を得ること、宿内での商業・飲食店の営業許可など、経済活動の特権である。そのため、小金宿は町場として江戸時代に発展した。

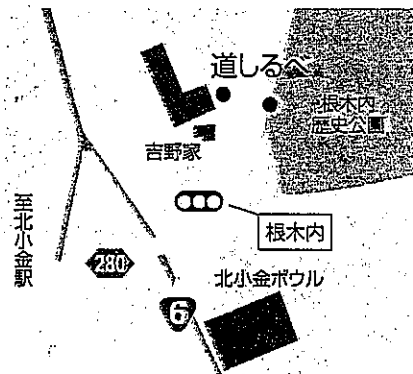
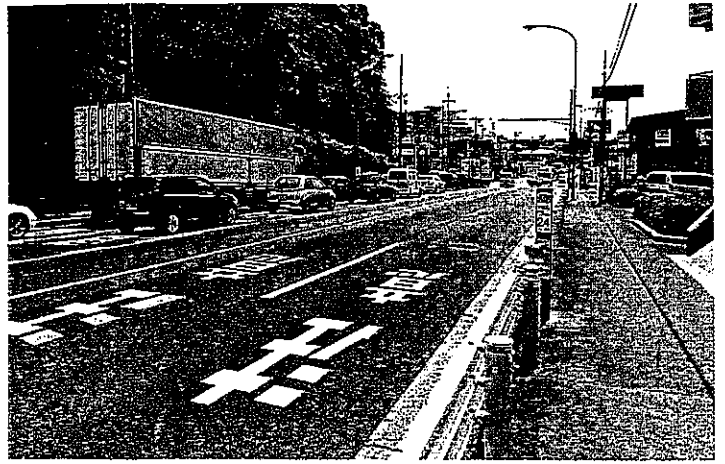
なお、江戸時代以前にも小金城に近く、金宿（こがねしゆく）と史料にも登場するので、江戸幕府が水戸道中を整備するにあたり、小金が宿駅に指定されたのだろう。

街道は小金宿の中を南北に縦貫し、南から下町・中町・上町の順に北上、上町から東に曲がって横町と区分されていた。宿継ぎで運ばれてきた人馬を継ぎ替える問屋場、大名・旗本・公用旅行者などが休憩・宿泊する本陣・脇本陣があったのが中町で、宿の中心だった。また、この中町には水戸徳川家の専用旅館があった。

水戸藩主は、常府（じょうふ）といって参勤交代（さんきんこうたい）の義務がなく、常に江戸屋敷で暮らすことになっていたが、時々幕府の許可をもらい水戸に帰った。江戸からの距離で初日に宿泊する場所が小金宿となったので、専用旅館が置かれたのだろう。また、水戸藩では藩主が常に江戸にいるため、水戸と江戸の間を毎日往復する家臣が多く、その場合も専用旅館が利用された。

小金宿の家数は、江戸時代中期の寛政元年（1789）で 169 軒と松戸宿とくらべれば小さいが、横町には小金牧を管理した野馬奉行（のまぶぎょう）の役宅（小金御廐役所）が、中町には関東十八檀林（だんりん）（学問所）のひとつ浄土宗東漸寺（じょうどしゅうとうぜんじ）が、下町には虚無僧（こむそう）の本山一月寺（いちげつじ）があるなど、特徴的な宿場であった。

なお、下町には宿場時代の旅籠（はたご）の建物をそのまま残す玉屋（たまや）がある。



左：「東京まで24km」  
 右上：左の緑が根木内歴史公園  
 右下：地図



## 「東京まで24 km」(根木内)

北に向かう国道6号線が松戸から流山にさしかかる手前にこの道しるべがあります。

これは国土交通省が主な国道に道路基準点とともに1kmごとに設置したもので、正しい緯度経度等が測られた基準点はGPSなどの基本になっています。

松戸市内には国道6号線上に上矢切(15km)から根木内(24km)までの10箇所と国道298号線上の上矢切(和光から30km)に道路基準点が設置されています。

かつては街道の一里(約4km)ごとに一里塚が作られ道中の目安となりました。

江戸から水戸までは通常2泊3日の行程とされ、水戸藩の江戸勤番も原則として土浦宿と小金宿を用いて往来したと言われています。

小金宿と松戸宿とは「1里28町」(約7km)、徒歩で2時間ほどの距離ですが、小金が江戸から最初の宿泊地にもなるのに対し松戸は江戸への日帰り圏内(片道約16km：徒歩4時間程度)で、松戸宿から歩いて相撲見物に出かけることもあったといえます。

おりしも夏祭りの時期、祭礼行事の慣習も小金と松戸で異なるのは江戸との距離によるものでしょうか。

小金八坂神社の祭礼ではお神輿が歌とともにゆったり担がれたり、独特なお囃子や古風な祭礼提灯が使われたりもしますが、松戸神社の祭礼ではお神輿は江戸前の早い調子、お囃子や装飾も東京と同じです。

